

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03190

研究課題名(和文)空間的实践とエスニシティからみた在日インド人と在日ネパール人—戦術から戦略へ

研究課題名(英文) Spatial practices and ethnicity of Indian and Nepalese diaspora in Japan—Tactics and strategies

研究代表者

澤 宗則 (SAWA, Munenori)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：40235453

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本におけるインド人移民社会とネパール人移民社会を比較しながら、「空間的实践」を分析することにより、エスニシティと空間との関係性を明らかにした。急増するネパール人経営の「インド料理」は、日本人から見れば「インド料理」であるが、「伝統的インド料理」の枠組みを超え、日本人の味覚にあわせて現地化する。安価な食材を使用し、サラリーマン、大学生や家族連れ向けに昼は安い定食屋、夜は安い居酒屋の位置づけである。これに対してインド人経営者が「これは全くインド料理ではない」と批判するなど、両者は単に同一市場における競合だけではなく、アイデンティティに関する対立となっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

移民がどのような「戦術」や「戦略」をとるかを考察した。エスニック集団と日本社会・出身地との相互作用関係を社会と空間との関連から明らかにした。在日ネパール人は急増するものの、全体像も不明のままであった。日本社会から見れば同一視されるインド人とネパール人の異なる「空間的实践」をつうじて、自分たちの空間を形成する方法、ホスト社会、出身地との関連性を明らかにした。競合する複数のエスニシティの比較考察は、従来の研究にはないものである。近似性が高いとされてきたインドとネパール人の移民を比較考察することにより、空間的实践からアプローチするエスニック研究の有効性が示される学術的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the relationship between ethnicity and place by analyzing "spatial practices" while comparing Indian immigrant societies and Nepalese immigrant societies in Japan.

The rapidly increasing number of "Indian food at restaurant" served by Nepalese is "Indian food" from the Japanese point of view, but it goes beyond the framework of "Traditional Indian food" and is localized according to the taste of the Japanese. It uses inexpensive ingredients and is positioned as a cheap set meal for lunch and a cheap izakaya for dinner for office workers, college students and families. On the other hand, Indian restaurant managers criticized that "this is not Indian food at all", and they are not only a competition in the same market, but a confrontation regarding identity.

研究分野：人文地理学

キーワード：移民社会 エスニシティ インド系移民 ネパール系移民

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本地理学会に「エスニック地理学」研究グループが設置されるなど、地理学においてエスニック研究は極めて重要な分野となりつつある。エスニック研究は、華僑・コリアン・日系人が中心で、南アジア系の移民研究は質量ともにまだ不十分と言わざるを得ない。現在急増する南アジアからの移民は、インドの IT 技術者・医師・コック、パキスタン・バングラデシュの自営業者・単純労働者、ネパールの留学生(日本語学校)・コック・単純労働者など、出身国による差異が大きい。また、エスニックコミュニティや集住地の形成方法も大きく異なる上、刻々と変化している。これらは、出身国の社会経済状況や移民の個人的属性などと関連されて論じることが多いが、これらだけでは捉えきれないものがある。また単一のエスニシティをホスト社会との関連だけで論じる研究が多く、競合するエスニシティ間の関係や出身地との関係に関しては研究が進んでいない。

在日インド人移民は IT 技術者を中心に東京都江戸川区西葛西で定住地が形成され、レストランや食材店、インド人学校、宗教施設が設置され、これらは故地に基盤を置くアイデンティティ形成装置となっている。また、近年の日本への移民の動向ではネパール人移民の急増が特筆される。特に、インド料理店で働くネパール人コックと同経営者が急増している。増加したインド料理店の多くはネパール人による経営である。彼らは現在新宿区大久保で集住地を形成中である

南インド系移民の研究に関しては、申請者らはすでに多くの成果を上げてきた。

1)Emerging of an Indian community in Tokyo. *The Indian Geography Journal* 2007(査読有)、2)「グローバル経済下のインドにおける空間の再編成」、人文地理 2010 (査読有)、3)「グローバルシティ・東京におけるインド人集住地の形成」国立民族学博物館調査報告、2009 (査読有)、4)「グローバル経済下の在日インド人社会における空間の再編成」高原ら編『現代アジア研究 1 越境』慶應義塾大学出版会 2008、5)Spatial Reorganisation of the Indian Community Crossing Border: A Case Study of the Global City Tokyo, *Japanese Journal of Human Geography* (人文地理) 2013(査読有)、6)「グローバル化にともなう空間の再編成」岡橋・友澤編『現代インド 4 台頭する新経済空間』東京大学出版会、2015(査読有)、7)「在日南アジア出身者の言語使用」真田・庄司編『日本の多言語社会』岩波書店、2005 など、日本とインドの地理学のみならず、南アジア研究や人類学、政治経済学、歴史学、社会言語学などにおいても研究成果を発表してきた。

また申請者はインドの地域社会変容についても多くの成果を発表してきた(8)「グローバル化にともなうインド農村の変容 - バンガロール近郊農村の脱領域化と再領域化」人文地理、2006(2007年度人文地理学会・学会賞)(査読有)、9) Transformation of Rural Community Neighbouring the Industrial Estate: Case Study of Village, Okahashi. eds. *Emerging New Industrial Spaces and Regional Developments in India*, MANOHAR, New Delhi, 2008.など)。

エスニック研究の多くがホスト社会から見たマイノリティとしての移民という枠組みであるのに対し、申請者らは出身国での詳細なフィールドワークの経験を生かし、多様で重層的な文化背景を持つ移民の立場に立ったアプローチが可能であるという特長がある。

移民社会は初期段階では使用可能な資源が限られ、その場しのぎの短期的な展望の下、協調が「戦術(strategy)」、(弱者が自分のものを持たない土地でなんとかやっていくための実践(ミシェル・ド・セルトー,1987))とならざるを得ない。人口増加とともに利用可能な資源が増える一方、属性が多様化し利害が競合し始めると、長期的な展望の下、「戦略(tactics)」

(自分の固有な土地を持つ権力主体が外部や客・競争相手との関係を管理するための実践(同))へと「空間的实践」(エスニックな空間における移民らが自分たちの空間を作り上げていこうとする行為)が次第に移行することが申請者らのこれまでの現地調査で明らかになりつつある。

2. 研究の目的

本研究では、日本におけるインド人移民社会とネパール人移民社会を比較しながら、「空間的实践」(「戦術」から「戦略」への移行プロセスと、「戦術」の多様化や変化)を分析することにより、エスニシティと空間との関係性を明らかにする。具体的には、まず各種統計により南アジアの出身国別に移民全体の社会経済的屬性を明らかにするとともに、ライフストーリー法により移民個人(家族)の変遷を把握する。そして、「戦術」段階の在日ネパール人と「戦術」から「戦術+戦略」段階へ移行しつつある在日インド人との比較をベースに置き、同一業界(急増するインド料理店)での両者の激しいせめぎ合い(協調しつつ対立する)、複数設立されたインド人学校間のせめぎ合いに焦点を当てる。この考察において、利用可能な資源(人材、食材、顧客や生徒、移民のネットワーク)の空間的分布のみならず、政治経済的な権力の獲得と、守るべきアイデンティティやホスト社会からのまなざしが重要になっていることを示す。

インド料理はインド人経営者の場合、正統インド料理の枠組みの中でのみ調理されるのに対し、ネパール人経営者はその枠組みから外れ日本人向けに味が現地化される。同じ食材を用いながらも、ここには「インド料理とは何か」に対するホスト社会・インド人・ネパール人の異なるまなざしが交差し、インド人とネパール人が激しく対立している。両国にまたがるコックの採用が彼らのネットワークとどのように関連し、出身地社会とどのように繋がるのかを分析する。インド人集住地に複数立地するインド人学校は競合し、それぞれ異なる高度なカリキュラムを商品として差別化を図る。その結果、インド人学校がアイデンティティ形成装置のみならずエスニックビジネスとして成立していることを示す。東京・横浜・千葉と京阪神を主な事例地と設定する。

3. 研究の方法

1) エスニック研究における社会理論の構築、2) 在日インド人社会・ネパール人社会に関する統計分析とフィールドワーク、3) インド・ネパールでの現地調査である。

1) グローバル化による空間の再編成と移民との関連、移民による「空間的实践」の論点において、研究史を総括すると共に、移民社会と空間における理論の再構築を行う。澤が担当。

2) 東京・神奈川・千葉・神戸・大阪などのインド人・ネパール人集住地で各種統計とフィールドワーク、アンケート調査をもとに、上記で得られた理論の検証を行う。澤と南埜が担当。

3) インド・ネパールでの日本への移民送り出し地域であるデリー及びボカラにおいて、移民が出身地域に与えた社会経済的影響について現地調査を行う。南埜が担当。

4. 研究成果

本研究では、日本における移民に関して、労働者、IT技術者、留学生、技能実習生に加え、エスニックビジネスを重要な社会経済的上昇手段として注目した。日本で急増するいわゆる「インド料理店」とスパイス食材店においてはそれぞれのエスニック戦略の違いが明確である。現在日本各地ではネパール人経営の「インド料理店」が急増している。日本人から見れば「インド料理」と認識するが、ネパール人経営の料理は「伝統的インド料理」の枠組みを超えて、餡をいれたナン、キーマカレーうどんなど日本人の味覚にあわせて現地化する。

安価な食材を使用し高価な輸入スパイスは控え、サラリーマン、大学生や家族連れ向けに昼は安い定食屋、夜は安い居酒屋の位置づけである。これに対してインド人経営者が「これは全くインド料理ではない！」と激しく批判するなど、両者は単に同一市場における競合だけではなく、アイデンティティに関する対立となっている。このように同一市場での競合・激しい対立があると同時に、インド人経営者がネパール人を雇用するなど、複数の国籍にまたがった移民のネットワーク形成も顕著に認められる。和食・インド料理・ネパール料理の多様な混交も認められる。他方、ムスリムのパキスタン人が経営する「インド料理店」は輸入のハラール食材を使用し、通常最大の利潤をもたらすアルコールでの収益を考えていないため、経営的に苦しい。パキスタン人経営者のメインビジネスは日本の中古車輸出業で、料理店経営はあくまで副業に過ぎないことが多い。モスクの周辺でハラール料理を出すのが目的で、ムスリム以外の顧客を増やす意思はあまりない。このように、各エスニックグループは、自らの社会資本(Social Capital)を活かしながら、ローカルな資源を読み解いた「空間的实践」を行っていることが分かる。

上記の研究目的、研究方法により、得られた研究成果は以下の通りである。

[論文]

南桢猛・澤宗則「インド系移民の現状と動向—インド政府統計による考察」兵庫地理 62, 2017, 1-18 (査読有)

澤宗則「大都市近郊農村からアーバンビレッジへの変容」地理 63-7, 2018, 40-49

南桢猛・澤宗則「日本におけるネパール人移民の動向」移民研究 13, 2017, 23-48(査読有)

澤宗則「インド人 IT 技術者—インド人コミュニティ」移民・ディアスポラ研究 9, 明石書店, 2020 (印刷中)

[学会発表]

澤宗則・南桢猛「ネパール料理人のエスニックビジネス—神戸のインド料理店のエスニック戦略」, 日本地理学会, 2020

南桢猛・澤宗則「ネパールにおける留学ビジネス—日本語「学校」の戦略」, 日本地理学会, 2020

南桢猛・澤宗則「日本への移民送出大国ネパールにおける日本語学校の立地展開と戦略」, 兵庫地理学協会, 2019

澤宗則・南桢猛「インド・ネパール・パキスタン料理店の地域戦略の比較—神戸市を事例として」, 日本地理学会, 2019

澤宗則・南桢猛「インド・ネパール・パキスタン料理店の地域戦略 - 神戸市を事例として」, 兵庫地理学協会, 2018

澤宗則・南桢猛「日本におけるインド系移民社会とネパール系移民社会の比較研究」, 日本地理学会, 2018

澤宗則・南桢猛「在日ネパール人のエスニックコミュニティの形成 - 在日インド人との比較考察」, 兵庫地理学協会, 2016

[図書]

澤宗則『インドのグローバル化と空間的再編成』古今書院, 2018, 330pages

澤宗則「日本に暮らすインド人」, インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』, 700-701, 2018, 丸善出版

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 南埜 猛、澤 宗則	4. 巻 13
2. 論文標題 日本におけるネパール人移民の動向	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 移民研究	6. 最初と最後の頁 23 48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 澤 宗則；森 日出樹；中條暁仁	4. 巻 8
2. 論文標題 都市近郊農村からアーバンビレッジへの変容－インド・デリー首都圏の1農村を事例に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島大学現代インド研究 - 空間と社会	6. 最初と最後の頁 1 - 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.15027/45577	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 南埜 猛、澤 宗則	4. 巻 62
2. 論文標題 インド系移民の現状と動向－インド政府統計による考察－	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 兵庫地理	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 澤 宗則・南埜 猛
2. 発表標題 インド・ネパール・パキスタン料理店の地域戦略 - 神戸市を事例として
3. 学会等名 兵庫地理学協会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤 宗則・南埜 猛
2. 発表標題 インド・ネパール・パキスタン料理店の地域戦略の比較－神戸市を事例として
3. 学会等名 日本地理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤 宗則、南埜 猛
2. 発表標題 日本におけるインド系移民社会とネパール系移民社会の比較研究
3. 学会等名 日本地理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤 宗則、南埜 猛
2. 発表標題 在日ネパール人のエスニックコミュニティの形成 - 在日インド人との比較考察
3. 学会等名 兵庫地理学協会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 南埜 猛、澤 宗則
2. 発表標題 日本への移民送出大国ネパールにおける日本語学校の立地展開と戦略
3. 学会等名 兵庫地理学協会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤 宗則、南埜 猛
2. 発表標題 ネパール料理人のエスニックビジネス 神戸のインド料理店のエスニック戦略
3. 学会等名 日本地理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 南埜 猛、澤 宗則
2. 発表標題 ネパールにおける留学ビジネス 日本語「学校」の戦略
3. 学会等名 日本地理学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 澤 宗則	4. 発行年 2018年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 338
3. 書名 インドのグローバル化と空間的再編成	

1. 著者名 インド文化事典編集委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 806
3. 書名 インド文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	南 埜 猛 (MINAMINO Takeshi) (20273815)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	